

Friend Island

# ともだち島

～ある老いた女船乗りの真実の物語

(2100年、聴取、記録)～

フランシス・スティーヴンズ

佐藤正明 訳

## 【解説】

作者フランシス・スティーヴンズ（一八八三～一九四八）は二十世紀最初の女性SF作家といってもいいでしょう。活躍時期は一九一七年から二三年と短く、その間に長編六作、中編二作、短編四作を雑誌に発表しています。ダーク・ファンタジーやホラー、サスペンスを得意としています。邦訳は短編「妖精の畏」が二〇一二年に電子出版で出ているのみです（現在は販売サイトがリンク切れ）。今回紹介する短編は雑誌〈オール・ストーリー・ウィークリー〉一九一八年九月七日号に発表されたものです。

フランシス・スティーヴンズの略歴・著作については、森田裕さんが〈ハードSF研究所広報 VOL150（二〇一七年四号）〉に掲載した「コレクターの本棚から22」で詳細に紹介しています。

ぼくがはじめて彼女に出会ったのは波止場地区だった。そこは腕利きだが懐具合のさびしい女船乗りたちがよく集まる、狭くてむさ苦しい軽食堂の中のひとつだった。アップタウンにある女性飛行家組合のきらびやかな溜まり場は彼女のような人にはふさわしくなかった。

風と太陽で赤銅色になった厳しい顔つきからは、彼女の年齢は憶測するしかなかったが、ぼくはすぐに推測して彼女の中に見てとったタービンやオイル・エンジンの時代の生き残り——その古き時代の真の海の女。当時は、男に対する女の優位性がずっと認められていなかった時代だった。自分たちの勝利を力説するために、あらゆる身分の女たちが、今日の時代の要求が必要とする以上に厳しくしていた時代だった。

笑顔を浮かべた小ぎれいな若い乙女たち——女機関士や大型アルミ圧延機の釜焚きたちだが、その職業にもかかわらず、金を糸を編み込んだ青のニットカーズとボレロといった、とてもきちんとした身だしなみだ——彼女たちは店に出入りするときに、今よりも厳しい時代の遺物である、そのきつい顔つきをした女性を横目で見ていた。

同様の視線がぼく自身にも投げ掛けられていたが（それは全世界で支配的な性別の溜まり場に踏み込んでいる、ただの男性だからなのだ）それを平然と無視して、老練女性の脇に椅子を引き寄せた。ポット一杯のお茶とカップ二つとマカロン一皿を注文してから、自分のいちばん愛想のいい態度を見せた。ひよつとしたらぼくのあからさまの賞賛と関心

はやりすぎでない手管になったのだろう。あるいはマカロンとお茶（どちらも絶品だ）が老いた海の女の口を軽くしたのかもしれない。いずれにしても慎重な質問に対して、彼女はまもなく一連の回想を、ぼくが期待した以上の彩りと変化をたつぷり加えて語り始めた。

「わたしが小娘だったころ」海の女はしばらくするとそう言った。「こんなちやらちやらした、金縁で、革のストッキングの贅沢品なんて海の近くにはなかった。わたしたちは自分のオイルとガソリンで航海した。もししくじったら、たぶんわたしたちに残されるのは浮き輪と荒波よ」

彼女は、今ではそんなに聞くことのない難破というひどい災難の場合に使う、救命具と呼ばれる空気入りの代物を脇の下にかかえる古めかしい方法のことに言及した。

「そうした時代にはまだ、わたしたち船乗り仲間に加わる勇敢な男がたくさんいたものよ。そう、いろんなことがあった」彼女はもったいぶって付け加えた。「そうした男たちの筋力腕力のおかげでかわいそうな船乗り娘がサメに食べられることもなく無事に陸にたどりついたこともあった。あ、あなたが思っているほどわたしは男たちを嫌っているわけじゃないのよ。わたしが同意しないのは、彼

らを甘やかすこと。当節、男に向いているのは子供のいる大家族で雑用をしたり子供の世話をしたりすることだけだとか、説教し過ぎなのよ。わたしの考えでは、女の肝っ玉を持つていない男が子供たちの世話をするのに向いているとは思えないし、ましてや育てるなんてとんでもない。でもそんなこと取るに足らないこと。わたしの時代は終わった。それは分かっているよ。そうでなければ、空のティールポットを前にして、あんたみたいな男の子を相手にむだ話を始めたりしないさ」

ほのめかしに気づいてほくは二人のカップに継ぎ足した。彼女は考え深げに十四個目のマカロンにかじりつくと、話を続けた。

「忘れられない航海があるんだよ。シャウター丸の船長メアリ・バーナクルと同じ歳になるくらいわたしは生きてしまったけど。その古びたシャウター丸に乗っていたときのことだった。それがその船の最後の航海になったし、メアリ船長にとっても最後だった。メアリ船長、彼女はかなり老いぼれだったので、長い眠りについて、そこで良き海水に身を沈めるのは慈悲だったかもしれない。

メアリ船長のために、わたしはその航海のことは覚えていて。でもそのことをよく覚えていられるのは、そのときがわたしの人生の

中でいちばん結婚してしまいそうになったときだったからさ。男として、その男はもうしぶんなかった。彼はこれまでに出会ったほかのどの男よりもずっと親しみやすかった。それにもし彼の何て言うか——男らしさをあらわにした、ちよつとした小さな出来事のせいで、ある点でわたしが我慢できなくなっていたら、今、彼はわたしのために家を切り盛りしていたと思うわ。

フリスコ（サンフランシスコ）からシルカティーンへのペチコートのを積んで出港したわたしたちは、ブリズベーンに向かった。メアリ船長はいつもペチコートに力を入れていた。革の半ズボンとか半スカートならはるかに儲かったでしょう。そうだったものはもつと売れ行きがよかったから。でもメアリ船長は、四分の三の持ち分の船主だったし、こう言っていたものよ。陸の女はペチコートを買うべきだし、彼女たちがそうしなくてもそのことで神や女神をせめてはいけなくてね。

出港したのは晴れの日だった。それはよくない前兆なの——当時はそうだった。神の天候と海が人間の交通にまだ影響力を持っているからね。海に出で二日もしないうちに、ぐるぐる渦を巻くどでかい強風に見舞われ、最初の一撃で老いぼれたシャウター丸は航路か

らすつかりはずれてしまった。でも彼女は頑丈な船だった。今のようなフェザー級で、ガス灯に照らされた、ペラペラの合金製船体ではなく、すみからすみまで強化アルミニウム製。彼女のタービンは寄せ波を切り裂いて四十五ノットの速力で飛ばし、あの頃の貨物船としては快速船と呼ばれたものさ。

でもあの夜は、泡立つ緑の大波をかきわけて進んでいるときに、何か未知のものがまずいことに船底の下を行き過ぎたんだよ。

わたしは船の上部の長い窪みになった雨よけ通路を歩いて、その日の午後あたりにどこかで落としたヘアピンを捜していた。それは金のヘアピンで、わたしが娘の頃は金はまだとても不足していたし、もちろんそれを大切にしていた。でも突然、足元で老いぼれシャウター丸が跳び上がったのを感じたの。まるで飛行機が飛んでるときに砲弾にやられたみたいだった。それから彼女は丸一秒間全身を震わせた。おびえたみたいに。それからわたしの耳に最後の審判の日の響きのような轟音が届き、船が宙を飛んで、金切り声を上げる強風のあぎとの中へとまっすぐ飛び込んでいくのが分かった。少なくともそう思えた。途方もない大波の谷間にわたしたちは落ち、水に浸かったわたしの耳で間近にばしゃんとい

う音を聞いたように思った。やっと水の上に出ると、そばに密封された真新しいアイスボックスが浮いていた。中は空みたいで、きちんと密封されているようだったので、そのアイスボックスはこうした時に女が望むことのできる格好の救命具になった。大きさはだいたい十フィート掛ける十二フィートで、荒れ狂う海に軽々と浮かんでいた。わたしは水から這い上がって蓋の上に乗ると、取っ手につかまりながら、近くにかわいそうな仲間の女たちが浮いていないか期待をこめて見回した。だれも見当たらなかった。シャウター丸が粉々になってしまい、ペチコートもメアリ船長もそのほかみんな沈んでしまったからだ。だった

「何がそんな爆発を引き起こしたんです？」  
「ぼくは興味津々でたずねた。」

「説明できるのは神様とメアリ・バーナクル船長だけさ」彼女は敬虔な答えを返した。「タービン用のオイルに加え、船は代りとなるエンジンとしてガソリン機関を積んでいた。おそらくそれが船の最期をそんなに早めた原因でしょう。とにかくわたしがもういちど見た船の名残といえは、神様がわたしの頭上近くに浮き上がらせた空のアイスボックスだけだった。その上にわたしは座って、浮いていた。」

浮きながらもうしばらく座っていた。やがて嵐はなんとか吹きやんで、太陽が輝き出した——これは翌朝になってからだけだ。それで髪の毛を乾かし、あたりを見回すことができた。わたしは小娘で、十歳だった。見た目は悪くなかったわ。死にたくなかった。いま目の前に座っているあなたと同じようにね。それで立ち上がって、陸地の出現を懇願した。果たして、日暮れごろに水平線近くに小さなしみが頭を出した。最初、ガスタービンの定期船だと思っただけ、やがてそれは小さな島だと分かった。広大な太平洋の中にぼつんとひとつだけ。

あら、何て運がいいんでしょう、とわたしは思った。これでアイスボックスとおさらばできる。空っぽだし、わたしには中に入れる水もないし、この緯度では手に入りそうもない。もうわたしには不要だわってね。抜き手を切って泳ぎ出し、一マイルかそこら泳いで、乾いた土地にほぼ三日ぶりに足をおろした。そこはきれいな土地でもあったが、北極地方の氷山みたいに人の姿がなかった。

わたしが上陸したのは輝く白い砂の浜で、揺れる美しいヤシの木の林までそれが駆け上がっていた。林の上には丘の斜面が見えた。高くて青々としていて、わたしに故郷を思い

出させた。メーン州で、登っていくとクーク  
オムゴモック湖のあたりに出るの。どこもか  
しこもひたすらわたしに微笑みかけているよ  
うに思えた。ヤシはやさしい海風に揺れて頭  
を下げ、まるでこう言いたがっているようだ  
った。『ただそこに腰を下ろして、くつろぎな  
さい。わたしたちはあなたが来るのを長いこ  
と待っていたのよ』わたしは大声で言った。  
歓迎されてとても幸せ、ってね。そのときわ  
たしは小娘で、人が自分をどう扱うかという  
ことに敏感だった。いまあなたは笑っている  
けど、わたしが感じたような感覚がなかった  
か、よく考えてみて、ごらんさい。

それで、わたしは立ち上がって服と長く柔  
らかい髪をもういちど乾かした。髪はじゅう  
ぶん乾かす価値があったわ。あのころは今よ  
りずっと豊かに生えていたもの。そのあとし  
ばらく歩いて行くとすてきな小道に出会った。  
道は曲がりくねって野生の森まで伸びていた。  
どうやら、とわたしは考えた。ここには住  
人がいるみたい。文明人かしら、未開人かし  
ら？ でもその小道をしばらく歩いて行くと  
どうしたことでしょう、道は突然終って、青々  
とした草が自然に輪になって生えた中に澄ん  
だ水をたたえた小さな泉がある場所に出たの。  
そこでわたしが最初に気づいたのは、泉のそ

ばのヤシの木に打ちつけられた白い板だった。  
すぐさまわたしは水をひたすら飲んだ。なぜ  
って、ほんとうに喉が渴いていたのよ。それ  
から、その板を見に行つた。明らかにそれは  
木製の荷箱の側面を引きはがしたものでした。  
文字が鉛筆で書かれていた。

『あなたが誰だろうと、お気の毒さま』と  
読めた。『この島はまともじゃない。だからお  
れは泳いで行け。あんたもそうしたほうが  
いい。あばよ。ネルソン・スマイス』という  
内容だったが、スペルはともひどかった。  
それは真新しく、最近作られたようで、まる  
でネルソン・スマイスが書いて打ちつけてから  
数時間とたっていないみたいだった。

そして、そのおかしな警告を読んだあと、  
わたしは悪寒を覚えたかのように全身が震え  
出した。そう、マラリアにかかったみたい  
に震えたの。熱帯の暑い太陽がわたしと  
警告板にじかに照りつけていたんだけど、ネ  
ルソン・スマイスが泳いで逃げ出すほどひどく  
彼をおびえさせたのが何だったのか？ わた  
しは本気で用心して注意深くあたりを見回し  
た。でも、肝をつぶすようなものは何ひとつ  
目に入らなかつた。ヤシや青々とした草や  
花々は依然として、とても穏やかで親しげに  
笑いかけているようだった。『ただくつろぎな

さい』とあたり一帯に書かれている言葉は、  
板に鉛筆で無造作に書かれたものよりずっと  
分かりやすかつた。

静まりかえっていることもあって、すぐに  
悪寒はなくなった。それからこう考えた。『や  
れやれ、このスマイスという御仁はただの凡人  
だつたんだと思うわ。どうやらひとりぼっち  
で臆病になつたようね。ありもしないものを  
空想しただけなのよ。かわいそうに、わたし  
が来る前に海に身を投げたんだわ。彼を不運  
な仲間同士として受け入れられたかもしれな  
いの。書き残したものから、彼は男だけど  
それなりの教育を受けていたのだと分かる』  
それでわたしは歓迎を最大限に利用するこ  
とにして、この先数週間それを享受すること  
に決めた。泉のすぐそばに洞窟があつた。ピ  
スケット・ボックスみたいに乾いていて、白  
い砂が敷き詰められたきれいな床だつた。ネ  
ルソンもそこに住んでいたことは、いろんな  
物が散らばっていることで分かつた——空き  
缶だとか新聞紙の切れ端だとか、そんな物。  
わたしは頭の中で彼をネルソンと呼ぶようにな  
つていた。そのうちネリーになつた。肌は  
浅黒かつたのか、色白だつたのか、どうして  
ひとりぼっちでそこに流れ着くことになつた  
のか、彼を死へと追いやつた奇妙な出来事と

は何だったのか、そんなことを思い巡らした。わたしはともかく洞窟の中をきれいにした。彼は缶詰の食料を食べ尽くしていた。それらはどうやって手に入れたかは分からなかった。でもこのことをわたしは気にしなかった。その島は豊かな土地だった。青いミルクココナツツ、甘いベリー、ウミガメの卵などがわたしの日々の食物だった。

およそ三週間の間、太陽は毎日輝き、鳥は歌い、サルはきやつきやつと騒いだ。わたしたちはみなひとつの大きな、幸せな家族だった。そしてその島を探検すればするほど、付き合っているその仲間たちが好きになった。島は海岸から海岸まで約十マイルあり、どこをとつても私有の大庭園のように魅力的できれいで、そうでないところなどなかった。

丘の上から大海を見ることができた。何マイルもの青い海の広がり。ガスタービンの定期船どころか政府の小型巡航船の影すらもなかった。その巡航船は、遺棄船などで海路が汚れないようきれいにするため、あらゆるところを巡っていたものだった。だけど、もしこの島が通常の航路から百マイルほどしか離れていなくても、わたしが助けられるまでに長い日にちがかかるかもしれないと分かっていた。丘の頂上は、わたしが最初に登ったと

きに分かったのだけれど、古い噴火口だった。それでその島が南回帰線と北回帰線の間の海にあつてひよっこり出会うことのある火山島のひとつだと分かった。

丘の斜面のあちこちや麓の密生した樹々の間で大きな岩の塊によく出会うことがあつた。そうしたものはその昔にあの噴火口から吹き出されたものに違いなかった。もしそこに火山岩があるとすれば、それは繁殖する緑にすっかりおおわれてしまうほど古いものだったのよ。鋤がなければ見つけ出せなかったけど、そんなものわたしは欲しくなかった。

そうね、最初は時間がたつぷりあるので幸せだった。散歩したり山登りしたり、浅瀬を歩いたり泳いだり、それから浜辺で長い髪をとかしたりした。運よく携帯櫛はなくなっていなかったし、金のヘアピンもけっこう残っていた。でもそのうち、ちよつとだけ心細くなりはじめていた。おかしいことに、その感覚はいったん湧き上がると、ほんとうに驚くほど急に、どんどん悪くなつていった。そしてちよつとその時期から日々は暗くなりはじめたの。天候は、大洋の島では見たことのないような、体によくない暑さ続きの長い日々となった。朝から晩までどんよりした雲が太陽を覆い隠した。あんなに元気そうだった小さ

なサルやインコたちでさえ病気になったようにふさぎこみ、活気がなかった。丸一日わたしは叫び、雨で体がびしょ濡れになるのにまかせた——それはここに来てはじめての雨だった——。夜になつても完全には乾かなかった。それでもわたしは洞窟の中で寝入つた。翌朝、わたしは雷のように激しく、自分自身と全世界に怒りをぶつつけた。

外を見ると、黒雲が渦巻いて空を横切っていた。聞こえるのは、浜辺に打ち寄せる大波の音と揺れるヤシの間を吹き抜けて荒れ狂う大風の音だけだった。

わたしがそこに立ち尽くしていると、むかつくような濡れた小ザルが枝から落ちてきて、わたしの頭に当たりそうになった。わたしは小石をつかむと、本気でそいつに投げつけた。『どっか行つちまえ、この汚いちびザルめ!』わたしは叫んだ。それと同時に、目のくらむような恐ろしい閃光が襲つた。爆竹のようなはじける音が長くして、それから何隻ものシヤウター丸の船団がいつぱんに爆発したような轟音がした。

我に返ると自分が洞窟の奥に逃げ込んでいるのに気づいた。指の爪で岩をもつと掘り進もうとしていた。よく考えたとすぐに、起こつたのはただの雷鳴だということが分かり、

外に出てみると、案の定、空地を横切るようにヤシの太木が倒れていた。すべて雷に打たれてぱっくり裂けた結果だった。小ザルがその下敷きになっていた。尻尾と後ろ足がはみ出しているのが見えたのだ。

わたしはひどい仕打ちをしたかわいそうな小さな獣がべちゃんこになっているのを目にして、ひどく恥ずかしくなった。打ち倒された木に座り込んで、わたしは考えに考えた。わたしはどれほど感謝すべきだっただろう。ここにわたしはおいしい食べ物や水にあふれた実り豊かな島を手に入れたのだ。飢えしかなない不毛の岩地がわたしの運命だったかもしれないのに。それで、考えていると、だんだん穏やかな気持ちでわたしを包んでいった。どんどん元気が出てきて、喜んで歌ったり踊ったりしそうなほどになった。

すぐに、その週で初めて太陽が明るく輝いていることに気づいた。風は吹きすさぶのをやめており、波はおさまって渚でさらさら歌うだけになっていた。あんな暴風雨のあとに、わたし自身の心の中の機嫌のようにこうした突然の平穏が訪れるなんて、ちよつと思議に思えた。すこし気分が悪かったがわたしは立ち上がり、あの小ザルがまた元気にならないか見に行つた。でもそれははかけたことだ

つた。サルはぐしゃつと押しつぶされて死んでいるのは分かつていた。わたしは亡骸を木の根元に埋めた。それをしながら、ひとつの確信を抱いた。

その確信にほとんど疑いをはさまなかった。どういうわけか、その島にひとりでそんなに長く暮らしていると、わたしの生まれつきの女の直感があとにも先にもいつもより強くなったのかもしれない。それで分かつたのよ。それからあわれなネルソン・スミスの板のところに行つて、それを木から引き剥がし、潮で流されるよう浜に投げ捨てた。その板はわたしの島に対する侮辱だったのよ！」

女船乗りは言葉を切つた。遠くを見るような目付きをしていた。ぼくのことや、たぶんマカロンやお茶のこともまったく忘れていたようだった。

「なぜそう思つたんですか？」と尋ね、彼女を引き戻そうとした。「島をどうやって侮辱できたんですか？」

彼女ははつとして、手で両目をこすり、それから急いでお茶をもう一杯注いだ。

「それはね」彼女はやつと喋つた。マカロンは宙に挙げたままだ。「その島が——わたしが上陸したその特別な島が——心を持っていたからよ！」

わたしが陽気だと、島は明るく楽しげだった。わたしが来たとき島は喜んだ。わたしをよくもてなしてくれて、わたしが不機嫌になると今度は思いやりからふさぎこまずにはいられなくなった。島はわたしを友だちのように愛してくれた。あのかわいそうなびしょぬれの小ザルさんにわたしが石を投げつけると、島は天罰のような怒りでわたしの行動を後押しして、わたしを喜ばせるために自分の子供を殺したのよ！でも島はわたしが自分の行いの間違いに気づくや否や、すつかり上機嫌になった。ネルソン・スミスが『この島はまともじゃない』と言う権利なまなかつたのよ。そこはわたしがこれまでに見たどの場所よりもともな場所だったのだから。わたしがあの偽りの板を投げ捨てると、鳥たちはみな夢中になつて歌い始めた。青いミルクココナッツが右に左に落ちてきた。サルたちだけがまだ何だか悲しそつたけど、無理もなかった。彼ら自身の母親である島が、わたしのために仲間の一匹に矛先を向けたのだから！」

そのあとわたしはとても慎重で思慮深くなつた。わたしはその島にアニタという名前をつけた。ほんとうの名前を知らなかつたし、名前があるかも分からなかつた。アニタはかわいい名前だった。それにちよつと南太平洋

らしかった。アニタとわたしはその日からずっと、おたがいにとても仲良くやっていた。

いつも陽気にして、カナリアのかわいい小鳥ちゃんのように歌いまわるのは、ちよつと心の負担だったけど、できる限りのことはした。だけれど、わたしがアニタに抱えている愛情や感謝があつても、どれほど思いやりを示されても、ひとつの島の仲間ではひとりの人間にとつて決してじゆうぶんなものではなかった。わたしはまだひとりぼつちで寂しかった。そして、大暴風はもういらなと言つつもりだったけど、空から雲を遠ざけておくことができない日々もあつた。

島が理解して、かわいそうな彼女が持つる恵みと元気のすべてをわたしに差し出して助けようとしているのが分かった。それにもかかわらず、ある日水平線に小さなしみが見えたとき、わたしの心は驚くほど飛び上がった。しみはどんどん近づき、ついにその正体を見てとることができた」

「船だったんでしょ、もちろん」とぼくは言った。「あなたは助けられたでしよっ」

「いいえ、船ではなかったわ」女船乗りはいくぶんいらだたしげに否定した。「あなたは意見やばかな質問をこれ以上せずにわたしに話をさせることはできないの？ 上げ潮でそん

なに速く近づいて来たのは、ほかならない別の島だったのよ！

あなたが驚いた顔をするのはもつともだわ。わたし自身びっくりしたもの。あなたよりずつとね、たぶん。今のあなたなら本を読んで知つていそうだけど、そのときのわたしは知らなかったの——ときどき漂っている島があるというのをね。そうした島の下側は、根っこや古い蔓の上に新しく生えたものが覆い尽くして、からみあつた寄せ集めになつていて、それがときどき強い風で本土から離れて航海に出ていくの。旧式の八本煙突の汽船みたいにゆつくりとね。この島は並外れて大きくて、岸から岸までたぶん二マイルほどあつた。ヤシの木が生えていて、生き物もいた。わたしが住んでいるアニタと同じようだった。それでわたしは、この漂流島がほんとうはかつてわたしの島の一部だったのではないかなつて、ときどき考えることがあつた——いわばこの島の娘みたいな。

いずれにしても、その浮き島が声の届く距離に来るや否や人の叫び声が聞こえ、すつかり気が狂っているみたいに岸边であちこち眺ね回っている男の姿があつた。次の瞬間、彼はわたしたちの間を隔てる細い水面に飛び込んで、数分でわたしが立っているところに泳

ぎ着いた。

そうよ、もちろんそれはネルソン・スミス以外の何者でもなかったわ！

彼を目にした瞬間、それが分かった。彼はまさに、あの板を書いてから全世界の海で最良の島から逃げ出そうと試みて命を落としかけた分別のない男という外観だった。ともかく彼が戻つて来られたことは喜ばしかった。なぜなら、彼を助けた浮き島ではココナッツがほとんどなくなつており、カメの卵については語るまでもなかった。食べ物不足していることは、未知のものを恐れている男を癒すためにわたしが知っている、もつとも確実な手段だった。

そうね、かいつまんで話しましょう。ネルソン・スミスは自分が飛行士だと告げた。当時、飛行士であることは、こんにち女性飛行家であることと同じではなかった。空には危険があつたし、海にも危険があり、彼はその両方を経験した。彼の燃料タンクが漏れており、彼はアニタのすぐ近くの海に墜落した。一、二箱の食料を残骸の中から救出出すのがやつとだった。

さて、お察しのことだと思つけど、わたしはこのネルソン・スミスを怖がらせて太平洋を泳がせようとしたのが何だったのか、どう



の激しい抗議を示す轟音で喋っていた。

わたしはその愚かな男の腕をつかむと、海辺まで走らせた。わたしたちは唯一の希望である浮き島に追いつくためにしっかりと泳がなければならなかった。吹き渡っている強い風に対して樹皮のロープは彼女をつなぎ止めておくことができなかつたし、彼女はその大綱を切ってしまった。二人が浮き島に這い上がったころには、大岩があちこちに降ってきた。細かい白い灰の雲が大気にあふれ、海をおおっていたので、わたしたちはしばらくの間お互いの姿を見ることができなかつた。

まるでアニタが激怒のあまりわたしたちに向けて石を投げつけているかのように、実際そうするのが彼女の意図だと思えた。わたしだって彼女を咎めたりしなかつたわ！  
幸い風は強く、わたしたちはすぐに石の届く範囲の外に出た。その後まもなく、わたしのかわいそうな怒れるアニタは水平線上の一条の煙でしかなくなつた。

『それじゃあ！』わたしがネルソンにそう言ったのは、口から灰をすつかり吐き出し、髪の毛から燃えかすを振り払ってからのこと。『それじゃあ、あなたが前にあそこに行ったとき突然立ち去った理由とというのはそれだつた！ あなたがああ島を怒らせて、ついにあ

のかわいそうな子があなたを追出し出したのね！』

『では』と彼は言った。前に感心していたほど温和ではなかつた。『おれはどうやったあ、いまいましい島がレディだと知ることができたんだ？』

『行いは言葉より雄弁だわ』とわたしは言った。『あなたはそれを彼女のレディらしい行動で知るべきだつたのよ！』

『噴火口と灼熱の噴石がレディらしいだど？』と彼は言った。『蛇がレディらしいのか？ ある時おれは缶詰の缶で親指を切つて、ちよつと悪態をついた、なあ——ほんのちよつとだぞ！』そして、洞窟中から何がおれる割れ目やおれが飲んでいた泉からもだぞ。何と、蛇どもだ！ 驚いたことに、蛇だぞ。でっかいの、ちつこいの、緑色の、赤いの、それに空色と緋色の縞々のものだ！ おれはどうしたかつて？ 海に跳び込んだよ、もちろん。ほかにどうしようがある？ 嘔まれたり飲み込まれたりして死ぬより、泳いでおぼれるほうがいいさ。だが、悪態をついたら岩から蛇どもが出てくるなんて、どうやって知ることができたんだ？』

『あなたには無理ね』とわたしは皮肉っぽ

く同意した。『ある人たちはレディに突然れんがで頭をなぐられるまで、彼女について知ることはないわ。現実的で、優しく、親切な警告だつたのよ、その蛇たちは。あなたは気にも止めなかつたけど！ 恥を知らないさい、ネリー』わたしは厳しい口調で言った。『アニタのような慎重のある小島は、あなたと穏やかに付き合うことはできないけど、あなたは彼女のもっとも尊い感情を、レディには聞くに耐えない言葉で傷つけたに違いないのよ！』  
それで彼は自分の横柄な態度をやめた。その言葉が真実だと分かつたからよ。

わたしはふたたびアニタと会うことはなかつた。彼女はネルソン・スマスの無作法で不愉快な言葉に対する正当な怒りのあまり、自分自身を大洋からすつかり吹き飛ばしてしまつたのかもしれない。分らないわ。わたしたちはようやく浮き島から救出され、フリスコに降ろされたら、わたしはできるだけ早くネルソンのことは忘れた。

彼はひとつの教訓を残してくれた。男というのは男らしさのかたまりで、最良の男でも、レディが我慢するために自分の感受性を犠牲にするほど良くはない。

ネルソン・スマス、彼はわたしが自分の見方でないと悟つたときほんとうに後悔してい

るように見えた。そして謝った。でも謝罪はわたしには無駄だった。わたしは彼に我慢がならなかった。わたしとわたしのすてきな女ともだちのかわいそうなアニタの面前でとつたあんな言動のあとではね！」

さて、ぼくはあらゆる時代の海の知識に精通している。幾重もの時の霧を通して、ぼくは海をさまよって冒険談を語る航海者たちの荒々しい海の旅を、うらやましく思っただけに見てきた。優位な性が本領を發揮して男を英雄の台座から追い払う前の話だ。ぼくは——印刷されたページを通して——オデッセウスの放浪の旅のあとをついて行った。ガリバーの前で有頂天の香を焚いた。ミュンヒハウゼン男爵のような物語に畏敬の念をもって接した。だが悲しいかな、これらは男だけだった！

女性がぼくらよりすぐれていない分野があるだろうか？

おとなしくぼくが頭を下げ、思いきつてふたたび目を上げたとき、老いた女船乗りは立ち去っていた。ぼくに残されたのは、追い越され打ち負かされた偶像たちに対する悲しみだった。それから信じられない人数分のマカロンとお茶の勘定書も残されていた。その量をもってすれば、彼女の話を信じることはいともたやすいと思つた。